

原著

## 次年度クラス担任希望に表出される 保育者の主体的な選択の要因

金 瑛 珠<sup>1)</sup>・片 川 智 子<sup>2)</sup>

Nursery Teachers' Rationale for Being in Charge of a Particular Age Group:  
An Examination of Factors Affecting Their Individual Preferences

Young Joo Kim<sup>1)</sup> and Tomoko Katakawa<sup>2)</sup>

### 要 旨

日々、子どもとかわり、保育を実践する当事者である保育者を、保育における主体的な存在としてとらえ、保育者は何を重視した上で次年度クラス担任の希望を出すのか、希望を出すにあたりどのような事項を考慮するのかを調査し、保育者の主体的な選択の要因は何なのか、について研究を行った。「持ち上がり希望」と「持ち上がり希望せず」の群に分けて分析を行った結果、持ち上がり希望の保育者はこれまでの子どもや保育者との関係が多く考慮され、持ち上がり希望ではない保育者は園全体の体制や新たな経験を積みたいと考えている等の違いが明らかになった。いずれを選択した場合においても、保育の経験を積み重ね、自分の学びを深めたい、よりよい保育を行いたいと思っていることが共通点として浮かび上がり、一人ひとりの保育者が、自身の保育者としての現在の在り方を基に、さらに専門性を高めていくための主体的な選択をしていることが明らかとなった。

キーワード：クラス担任、選択、保育者の主体性、保育者の専門性

### I. 問題と目的

#### 1. 本研究の問題の背景となる“主体的な存在としての保育者”

待機児童問題が社会問題として認識されて久しい。2001年には「待機児童ゼロ作戦」が、2008年には「新待機児童ゼロ作戦」が、2013年には「待機児童解消加速化プラン」が、2017年には「子育て安心プラン」が厚生労働省によって策定されてい

る。関連して、保育施設を増やす課題と保育士不足問題に伴う潜在保育士の再就職支援等も問題となっている。また、保育施設の数を追うと同時に「保育の質」をどのように保障するのか、という質の問題も危惧されている。要するに、「保育の担い手の確保」という“数”の視点と「子どもの発達の保証」という“質”の視点が大きな問題点としてクローズアップされている。

また、保育者は将来を担う子どもたちのより良い

1) 金 瑛珠 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) kim-yonju@tokyomirai.jp  
2) 片川 智子 鶴見大学短期大学部保育科 (Tsurumi Junior College) katakawa-t@tsurumi-u.ac.jp

育ちを支える専門職であるにも関わらず、低賃金であること、専門職としてのステイタスが低いことなどが、長い間、問題視され続けていた。この問題に対し、待機児童問題とも関連して、離職率を食い止め保育士不足を回避することや、保育士の資質・専門性の向上を目的に、国が保育士等（民間）のキャリアアップの仕組みとリンクさせる形で処遇改善の具体的なイメージを打ち出し、漸く国や自治体が対策に動き出した。

このように“数（量）”と“質”の問題に焦点が当てられて、様々な対策がなされる一方で、日々、子どもと共に生活をしている保育者一人ひとりが、どのような保育をしたいと考えているのか、という保育者の当事者性が置き去りにになっているのではないかと筆者らは考える。保育者自身が、保育にやりがいや魅力を感じ、または何らかの意思をもって保育者であり続ける選択をしている。本研究では、日々、子どもとかわり、保育を実践する当事者である保育者を、主体的な存在として捉え、保育者自身の選択やその意思に焦点を当てていくこととする。

## 2. 先行研究の検討

昨今の状況から、保育士不足・潜在保育士に焦点をあてた研究も近年多いが、それらの研究の方向性としては、以下の二つが大きな特徴であるといえよう。一つが、保育士の早期離職に焦点を当て、長く働くための条件などに言及するもの。もう一つが、保育士資格をもちながら、保育職に就いていない人の実態調査や就労をどのように促すか、つまり、就労までの支援や就労後の支援（キャリア支援）に言及するもの、である。従って、これらは、冒頭で述べた“数（量）”の問題に帰結する傾向がある。そのことに対し、神戸ら（2016）は、「退職理由など続けられない理由ばかりが研究され、続けている人の続けられる理由の研究等が少ない」と着目し、20代30代の保育士の「やめた人」と「続けている人」についての分析を行っているが、潜在保育士のキャリア研究がテーマである性格上、退職理由と働き続けた

い理由、やりがいに限定され、保育者の“どのような保育をしたいか”という主体的な意思より、働き続けるための条件に焦点が当てられている。

菊地（2007）は現任保育士の職業継続理由ならびに職務への不満や負担感の発生理由について研究を行い、その結論と考察にて、継続理由を以下のようにまとめている。

「①現任保育士の職業継続理由のうち、最も回答数の多いのは学生と共通して「子どもが好きだから」というものであった。つづいて順に、経済的理由である「生活のため」、職務の専門性を鑑みた「保育の仕事に誇りを持っているから」の回答が上位を占めた。

②（省略）

③職業継続理由の上位2項目であった「子どもが好きだから」ならびに「生活のため」に関しては、回答数と解答者の年齢との間にそれぞれ相関が認められた。（中略）職業継続理由は一般に、年齢が上がるにつれて志や想いの部分から経済的理由や働きやすさの部分へと変化することが明らかとなった。

（以下省略）」

年齢に関連して継続理由が変化することが示され興味深い結果であるが、志や想いと経済的な理由や働きやすさが2極で示されており、疑問が残る。志を持ちながら働き続けることが、生活のための側面を持つこともあり、これらは両立しないものではないからである。そのため、職業継続理由については、年齢による変化も踏まえ、幅広い勤続年数の保育者を対象に、複雑な理由も示せる方法で、調査を行う必要があると考えられる。

中根（2012）は、「保育者の労働、さらには生活の実態を把握するために注目する必要があるのは基本的には勤務先の経営主体と雇用形態である。なぜなら、経営主体が公立（幼稚園の場合、国立も含む）であるのか、私立であるのかによって、また正規職員であるのか、非正規職員であるのかによって、その労働条件は異なり、さらに、こうした労働条件の相違が結果的に保育者の平均勤続年数の相違を生

み出している一因であるとも考えられる。」と述べている。ここでは、勤続年数に関わる要因として労働環境の問題が重視される。確かに、勤続にあたり、労働環境は重要であり、勤続の理由の一つになることもあれば、保育者であり続けようとする意志を支えることもあるだろう。しかし、なぜ保育者であり続けようとするのか、その動機や意思の中身は明らかにされていない。

金城・安見・中田(2011)によると、「保育職のやりがい」を構成する要因は「子どもの成長の喜び」><保育内容の実施に持てる力を発揮できたこと><保護者からの理解と支援><職場の人間関係で得られる満足感・達成感>」であるという。この4つの要因は、日々の保育実践の中で保育者自身が感じるやりがいだといえるだろう。これらのやりがいは、それまでの経験等から現状に対して感じている内容であるが、保育者が今後に向けてどのような保育をしていきたいと考えているか、今後に向けての保育者の具体的なビジョンや思いを示しているものではない。

### 3. 研究目的

これらを踏まえ、本研究では保育者が保育を続けるにあたって今後の保育を具体的にイメージする機会と考えられる、次年度クラス担任希望の調査に着目する。保育者は、最終決定権はないものの、意向調査がある場合、一人の保育者として、主体的に自分自身の意向を伝えることができる。その際、自身の働き方やどのような保育をしたいかという具体的なビジョンをもっていると考えられる。そこで、何を重視した上で次年度クラス担任の希望を出すのか、その過程において考慮される事項、すなわち、保育者の主体的な選択の要因に焦点を当てていくことを目的とする。

なお、先行研究の検討で記したように、金城ら(2011)がやりがいとして示した4つの要因のうちの2つに、<子どもの成長の喜び>、<保護者からの理解と支援>がある。<子どもの成長の喜び>の内

容としては、子どもが何かをできるようになったことが多く挙げられており、これは、同一の子どもまたはクラス集団と継続的に関わることで得られる内容である。また、<保護者からの理解と支援>については、「職場の人間関係や保護者からソーシャルサポートを受けることができる保育者は「保育職のやりがい」につながる」とある。このことから、次年度クラスとして持ち上がりを希望する場合には、翌年度の保育に対するビジョンも持ちやすく、子どもの成長や保護者からの理解や支援が得られることが希望理由となる可能性が高いと考えられる。また、次年度クラスとして持ち上がりを希望しない場合には、現在関わっている子どもの成長の喜びや保護者との関係以上に何か重きをおいている理由があると仮定することができるだろう。そこで、次年度クラス担任希望の意識調査において、持ち上がりを希望したか否かとその理由に焦点を当て、それぞれの要因について分析・考察していくこととする。

## II. 研究方法

### 1. 対象と方法

東京都内X区の公立保育所・公立こども園及び同一法人立の複数園に勤務する正規職員(園長・副園長・主任を除く)に無記名自記式にてアンケート調査を行った。X区については、所管課課長に依頼し、指導主事から各園長に趣旨説明を行い、後日、園毎にアンケート用紙を配布した。アンケートは保育者が記述後、一人ずつ厳封した上で園ごとに回収し、返送用レターパックで郵送をしてもらい、回収を行った。また、法人立の複数園に対しては、理事長から各園長に趣旨説明を行い、配布・提出・回収は同様の方法をとった。(配布・472枚/回収・374枚/回収率・79.2%)

アンケートの配布時期は、次年度担任が確定するタイミングである平成28年3月であり、回収時期は保育者の異動等がある前の3月末を提出期限として設けた。

## 2. アンケート項目

アンケート項目及び回答方法は以下のとおりである。経験年数、現在の担任クラスと次年度希望クラスの年齢、及び希望時に考慮した事柄は択一式、希望理由は自由記述式。

## 3. 倫理的配慮

本研究については、X区の保育所、こども園所管課課長および法人理事長に研究目的を口頭及び文書にて説明し、アンケート用紙を見てもらった上で、職員への配布の許可を得て、調査を行った。アンケートは研究目的を書面にて説明し回答を依頼、個人の特定ができないよう無記名とした。回収にあたっては、アンケート用紙と共に配布した封筒にて、個人が厳封の上、提出する形式をとった。

## 4. 分析方法

本研究では、保育者が次年度クラスを希望する際に考慮した事柄を検討するため、特に次年度クラス担任希望理由の自由記述を対象に内容分析を行った。分析は、KHCoder<sup>注1)</sup>を用い、次年度希望クラスが現在の担任クラスからの継続の場合と現在の担任クラスからの継続ではない場合、すなわち、別のクラスの場合（以下、持ち上がり希望と持ち上がり希望せず、とする）のそれぞれについて分析した。

KHCoderでは、「文章から語を切り出すために、内部で茶筌を利用した形態素解析を実行し」品詞を判別している。この結果抽出された各語の出現数から、出現数の多い上位2割を特徴語とした。その際、品詞は名詞、サ変名詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、動詞、形容詞、副詞を対象とした。更に特徴語同士の関連性を検討するため、持ち上がり希望群の理由と、持ち上がり希望せず群の理由それぞれについて、共起ネットワーク分析を行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 基本的属性について

アンケート配布の対象であった保育者の経験年数はFig.1の通りである（各園の配布対象者は、園長・副園長・主任を除く保育者、とした）。アンケートの際は経験年数を記入してもらったが、全体像を把握するため、5年ごとに分類した結果、経験年数1～5年、6～10年までは20%弱であり、11年以上35年以下の5年ごとでは各々10%前後、36～39年、40年以上が5%未満の分布となった。

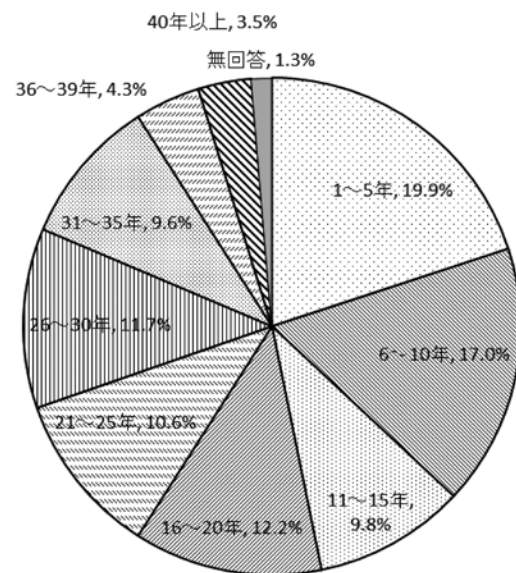


Fig.1 保育者の経験年数

### 2. 次年度クラス希望時に考慮する事項

持ち上がり希望は147名（39.1%）、持ち上がり希望せずは163名（43.4%）<sup>注2)</sup>、無回答は70名（18.6%）<sup>注3)</sup>であったが、次年度クラス希望時の考慮する事柄について、択一式の回答の割合は以下のFig.2の通りであった。

次年度クラスを希望する際に考慮する事柄として、一番多く選択されたのは「子どもとの関係」であり、次年度の自身の保育を考える上で、子どものことはやはり主に考慮される事項であることが読み取れる。そして、2番目に考慮される事項として「全体のバランス」が24.2%と高い割合を占めているこ

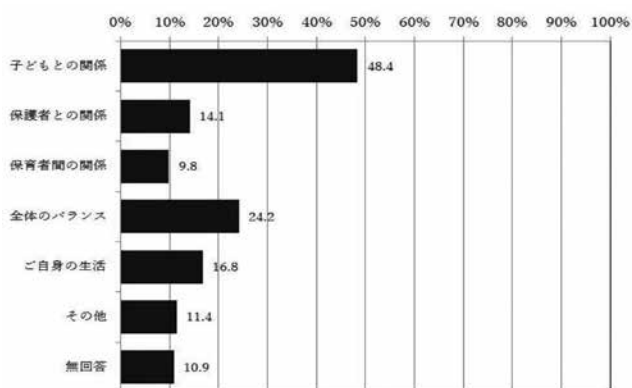


Fig.2 次年度クラス希望時の考慮する事柄 (択一式)

とが明らかになった。自身と保護者・保育者同士の関係を上回る形で、保育者が職場内の全体のバランスを考慮しながら自分自身の担当するクラスをイメージしていることが読み取れる。

### 3. 持ち上がり希望と持ち上がり希望せずの保育者の特徴語

自由記述である次年度クラス希望の理由の回答数は、持ち上がり希望が147名中140名(95.2%)、持ち上がり希望せずが163名中153名(93.8%)であった。これらの記述について、どのような語が多く出現したのかを把握するため、持ち上がり希望と持ち上がり希望せずの群それぞれについて出現数上位2割の語を特徴語として示したものがTable1である。持ち上がり希望保育者の対象品詞の語数は224語であり、うち上位2割は43語、出現数は4回以上である。持ち上がり希望せずの保育者の対象品詞の語数は254語であり、うち上位2割は53語、出現数は3回以上となった。

それぞれの群に共通する特徴語としては、「子ども」「保育」「関係」「クラス」等23語あった。特に、持ち上りを希望する群では「子ども」が97回と同群の対象語出現総数887回の約11%を占めている。その後、「成長」「関係」と子どもの成長や子どもとの関係に関わる語が続く。持ち上りを希望せずの群では「クラス」が108回と同群の対象語出現総数813回の約13.5%を占め、2位の「担任」の2倍以上の出現率である。以下は「担任」「経験」「希望」と、

クラス担任としての経験や、希望年齢クラスの経験に関する語が上位に挙げられた。また、持ち上がり希望せずの保育者の抽出語には「全体」「職員」「体制」「運営」等、園全体の運営を考慮した語が複数出現していることも読み取れる。(Table1)

### 4. 次年度クラス希望時に考慮する事柄の様相

Fig.3及びFig.4は、持ち上がり希望群と持ち上がり希望せず群それぞれの特徴語を対象として共起ネットワークをサブグラフ検出し、示したものである。強い共起関係ほど太い線で結び、出現数の多い語ほど大きな円で示している。サブグラフ検出とは、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を分類して示したものである。実線は同じサブグラフに含まれることを意味し、破線は互いに異なるサブグラフに含まれる語であることを意味している。

#### (1) 持ち上がり希望群

持ち上がり希望で考慮した内容のグループ分けを見ると、主に次のような内容が浮かび上がる。

- ① 「子ども」「保育」「関係」「継続」等の、これまで築いた関係に重点が置かれる内容

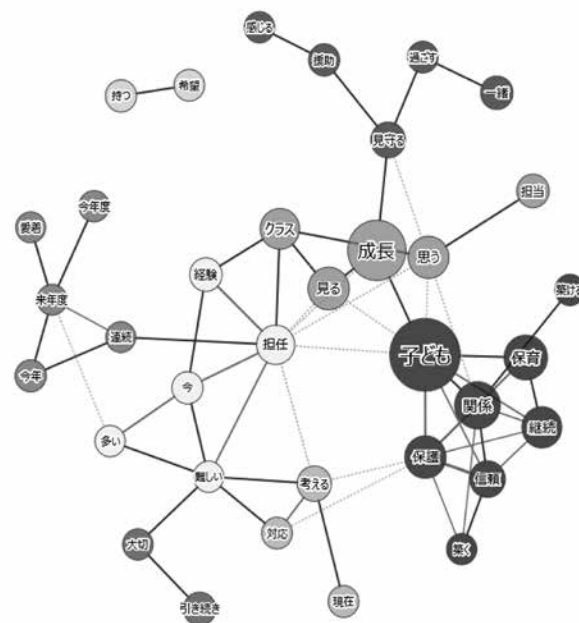


Fig.3 持ち上がり希望 特徴語 共起ネットワーク

Tabel.1 次年度クラス希望理由の特徴語

Q 5 持ち上がり希望群				Q 6 持ち上がり希望せず群			
順位	抽出語	品詞	出現数	順位	抽出語	品詞	出現数
1	子ども	名詞	97	1	クラス	名詞	108
2	成長	サ変名詞	69	2	担任	サ変名詞	40
3	関係	サ変名詞	40	3	経験	サ変名詞	34
4	保育	サ変名詞	35	4	希望	サ変名詞	33
5	保護者	名詞	30	5	保育	サ変名詞	31
5	見る	動詞	30	6	持ち上がる	動詞	24
7	思う	動詞	29	6	持つ	動詞	24
8	継続	サ変名詞	27	8	幼児	名詞	23
9	クラス	名詞	26	8	思う	動詞	23
10	担任	サ変名詞	23	10	子ども	名詞	14
11	信頼	サ変名詞	17	11	担当	サ変名詞	13
12	見守る	動詞	15	12	乳児	名詞	11
13	発達	サ変名詞	14	12	異動	サ変名詞	11
13	考える	動詞	14	12	考える	動詞	11
13	持ち上がる	動詞	14	15	自分	名詞	10
16	引き続き	副詞	13	15	全体	副詞可能	10
17	一緒	サ変名詞	10	17	現在	副詞可能	9
17	経験	サ変名詞	10	18	良い	形容詞	8
17	担当	サ変名詞	10	19	年数	名詞	6
20	続く	動詞	8	19	年長	名詞	6
21	援助	サ変名詞	7	19	成長	サ変名詞	6
21	今	副詞可能	7	19	今年度	副詞可能	6
21	今年	副詞可能	7	19	多い	形容詞	6
21	持つ	動詞	7	24	自身	名詞	5
25	希望	サ変名詞	6	24	年齢	名詞	5
25	対応	サ変名詞	6	24	勉強	サ変名詞	5
25	現在	副詞可能	6	24	保護	サ変名詞	5
25	過ごす	動詞	6	24	今	副詞可能	5
25	見届ける	動詞	6	24	今年	副詞可能	5
30	大切	形容動詞	5	24	感じる	動詞	5
30	今後	副詞可能	5	31	フリー	名詞	4
30	今年度	副詞可能	5	31	園長	名詞	4
30	感じる	動詞	5	31	職員	名詞	4
30	築く	動詞	5	31	体制	名詞	4
30	築ける	動詞	5	31	年度	名詞	4
30	多い	形容詞	5	31	運営	サ変名詞	4
30	難しい	形容詞	5	31	関係	サ変名詞	4
38	自分	名詞	4	31	発達	サ変名詞	4
38	愛着	サ変名詞	4	31	必要	形容動詞	4
38	就学	サ変名詞	4	31	違う	動詞	4
38	連続	サ変名詞	4	31	学ぶ	動詞	4
38	来年度	副詞可能	4	31	見る	動詞	4
38	関わる	動詞	4	31	特に	副詞可能	4
				44	立場	名詞	3
				44	教育	サ変名詞	3
				44	産休	サ変名詞	3
				44	子育て	サ変名詞	3
				44	円滑	形容動詞	3
				44	以前	副詞可能	3
				44	活かす	動詞	3
				44	行う	動詞	3
				44	出す	動詞	3
				44	少ない	形容詞	3

「1年かけて築いた信頼関係（子ども、保護者共に）を基により密な保育ができると考えるため」など、既に築いてきた関係を大切にしていきたい、現在の関係を基に更に保育を深めていきたいといった考えが読み取れる記述が多く、また、1年間信頼関係を築いてきた、現在築かれているという関係に重きを置いていることが伺える。中でも、「継続」に関しては、“継続した関係（対子ども・対保護者）”、“継続した保育（継続して子どもの成長をみたい）”などの思いが込められている記述が多く、「継続」という抽出語は、持ち上がり希望にのみ出現する単語であった。

② 「担任」「経験」「難しい」等の、経験を生かして難しさに対応しようとする内容

「1歳児は自我の芽生えから対応の難しい時なので、親子共に乗りこえられる手助けをしたい」といった、その年齢や発達の課題を考慮し、保育を構想しようとする記述や、「子どもも、保護者も対応が難しい人がおり、関係ができてきた職員が担任をした方が良いのではと考えたため」等、これまでの関わりから分かっている具体的な難しさに、経験を生かして対応しようとする回答が見られる。想定される課題だからこそ、自ら継続し引き受けようとする考えが読み取れる。

③ 「成長」「見る」「クラス」「担当」等の、クラスの子どもたちの成長を見たいという内容

「今年度見てきた子どもたちの成長を、来年度も近くで見守りたいから」など、1年間共に過ごしたクラスの子どもの成長に、引き続き関わってほしいという思いが記述されている。また、「4歳児の頃から5歳児になったら子どもたちと『あんなことがしたいね、こんなこともしてみたい』と話をしていた。継続し子どもたちを見守っていくことで小さな成長の姿等にも気づけるのではないかな。」などのように、具体的な活動や、子ども理解の深まりを期待する思いが読み取れる。

④ 「見守る」「援助」「一緒」「過ごす」等の、子どもたちと継続して一緒に過ごしたいという内容

「一年間一緒に生活してきたから」「その子どもたちともう一年一緒に過ごしたかったため」など、これまで共に過ごしてきた子どもたちと、引き続き共に生活し、子どもたちの生活を支えていきたいという思いが読み取れる。

(2) 持ち上がり希望せず群

続いて、持ち上がり希望せずの群の理由や考慮した内容のグループ分けを見ると、主に次のような内容が浮かび上がる。

⑤ 「担任」「希望」「乳児」「幼児」等の、未経験の年齢区分での保育を希望する内容

「幼児クラス未経験だったため、持ち上がりでないクラスを希望しました。」「幼児クラスの経験をし、学びを深めたいため」、「幼児クラスの経験が少なく、今度の4歳児は0、1歳で担任していたので」など、担任として実践しながら学びを深め、自らの保育の経験の幅を広げていくために、未経験または経験の少ない年齢区分を希望する記述がみられる。また、「乳児」クラス「幼児」クラスと

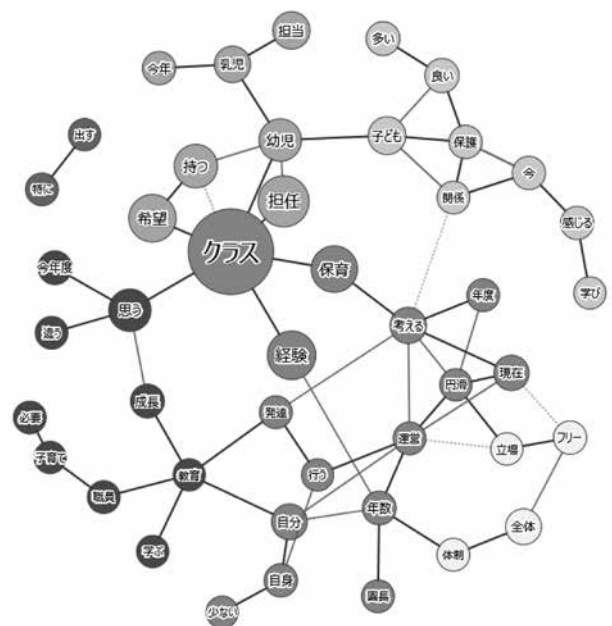


Fig.4：持ち上がり希望せず 特徴語 共起ネットワーク

の保育内容の違いを前提に考えられていることが分かる。なお、前年度からの持ち上がりではないにせよ、過去に担任をした子どもたちのクラスを再び持ちたい、という記述も複数見られた。

⑥ 「体制」「全体」等の、園全体のバランスに関する内容

「全体の体制をみて」、「経験年数もあり、園全体の体制をみて」、「今年度が持ちあがりのクラスだった為、3年続けてのクラスよりはと思ひ、全体の体制も考えて、0歳を希望しました。」等、園全体の職員構成や状況を考慮して、次年度クラス希望を選択している記述が見られる。自身の希望だけでなく、職員同士の連携や園の保育運営を支える一員としての意識を持ち、保育にあたっていることが読み取れる。

⑦ 「クラス」「経験」「保育」等の、自身の経験を生かす、または経験して学ぼうとする内容

「今年度までの自分の経験を生かせると思ったから」、「自分自身の経験年数、今後のこと（異動までの残り年数）を踏まえ、1人担任としてクラス運営を行い自身の力をつけたいと思った為」などと、これまでの経験を生かし、更に自身の保育を高めていこうとする思いが記述されている。また、「子育て経験を0才児クラスで活かしたいため」という、私的な経験を保育に生かしたいという思いの記述もみられた。

⑧ 「子ども」「保護（者）」「関係」等の、子どもや保護者との新たな関係を考えようとする内容

「今までの経験を生かして、再度新しい保護者との関係作りをしていきたいです。」、「保育室は変わるので改めて考えていくことも増えます。」と、新年度として新たな環境になることも含めての期待感が伝わるものや、保育環境が変わることにより、その都度状況に合わせて前向きに保育を考えていく思いが読み取れる。また、「保護者、子ども共に幼児になる機会に別の担任と関係を新しくつくった方がいい」など、関係が固定化せず広がっていくことを大切とする考えも見受けられた。

その他、「子育て」「職員」「必要」などの語には「子育て支援は、昨年度に初めて担当になり、それまでの通常クラスの担任とはまた違った様々な保護者や子どもとの関係、事務等があったので、それを次年度に活かしていきかけたため」、「子育て支援は事業として最先端なので極めていきたい。また、100名近い保護者との関係を一年で終えるのはもったいない。また、当番がなく生活にゆとりを持てること。」、「園全体の配置から子育て事業を継続、引き継ぎする職員が必要だから。」、「子育て支援は、一度も経験がないため。仕組み等含め、勉強したいと思ったから。」などの子育て支援事業に関しては、“持ち上がり／持ち上がりせず”の分類には入らないものの、明確な意思をもって希望をしていることが読み取れる。

上記のそれぞれの特徴語／共起ネットワークおよびそれに関する自由記述からは、保育者が次年度のクラス希望を考える、即ち次年度の自分の保育を見通した時、さまざまな事柄を考慮し、自身の保育を構想した上で、選択していることが読み取れる。

#### IV. 考察

次年度クラス希望の理由については、自由記述であったにもかかわらず、高い回答率が得られた。理由には、特徴語以外にも様々なものがあつたが、一人ひとりの保育者の各々の事情や状況を踏まえて主体的に今できる選択をしていると考えられる。

特徴語の共起ネットワークから捉えられた、保育者が次年度の自身の保育を構想する際に考慮する主な事柄について見ると、持ち上がり希望の保育者はこれまでの子どもや保育者との関係が多く考慮され、持ち上がり希望でない保育者は園全体の体制や新たな経験を積むことを考えている等の違いがあつた。

持ち上がり希望の保育者の希望理由としては、その特徴語から、①これまで築いた関係に重点が置かれる内容、②経験を生かして難しさに対応しようとする内容、③クラスの子どもたちの成長を見たいと



いう内容、④子どもたちと継続して一緒に過ごしたいという内容、が浮かび上がった。これら①～④の理由全てが、子どもや保護者との継続的な関係を生かして保育を構想し選択していることが分かる。研究目的において、先行研究に基づき「次年度クラスとして持ち上がりを希望する場合には、翌年度の保育に対するビジョンも持ちやすく、子どもの成長や保護者からの理解や支援が得られることが希望理由となる可能性が高い」と考えたが、その予想とも一致している。

一方、持ち上がり希望でない保育者の理由としては、その特徴語から、⑤未経験の年齢区分での保育を希望する内容、⑥園全体のバランスに関する内容、⑦自身の経験を生かす、または経験して学ぼうとする内容、⑧子どもや保護者との新たな関係を考えようとする内容、が浮かび上がった。この結果からは、現在関わっている子どもや保護者との関係性の継続以外の様々な次年度の保育への思いがあることが分かる。⑤や⑦からは、実践によって自身の保育の質向上を目指す、これまで得たことを実践に生かそうとするといった、自身がより良い保育を行うための選択であることが読み取れる。⑥のような園全体の体制に関する内容は、持ち上がりを希望しない保育者の記述として特徴的なものであり、次年度クラス希望時に考慮する事項の中でも、子どもとの関係に続いて2番目に多い内容である (Fig.2参照)。また、その他として挙げた子育て支援事業に関する内容も、園全体の配置などに触れられている。これらは園全体の運営、役割等を見据えた選択であると言える。⑧では保育における進級の意味、子どもや保護者にとっての経験の広がりなどが考えられている。

以上のことから、保育者は、現在関わっている子どもや保護者との関係性の他、自身の保育の質向上や、より良い実践の試行、経験の蓄積、園全体の保育の在り方、保育における新年度の考え方等、各々の視点から、次年度の保育を主体的に構想し、クラス担任希望を表出していることが分かった。

持ち上がり希望の保育者と持ち上がり希望せずの

保育者の理由は、いずれも保育の経験を積み重ね、自身の学びを深めたい、より良い保育を行いたいという点で共通していることが分かる。一人ひとりの保育者がどちらの選択においても、自身の保育者としての現在のあり方を基に、更に専門性を高めていくための、主体的な選択をしていると考えられる。

ただし、本研究では希望理由の特徴語に焦点を当てていることから、分析結果として挙げられた事柄以外にも様々な選択の要因があることが予想される。

## V. おわりに

本研究では、保育者自身の主体的選択である次年度クラス担任希望に着目した結果、今現在、共に生活をしている子どもたちとの近い将来を見据えた次年度イメージや、自分自身が保育者として在り続けるためのキャリアを見据えた次年度イメージ、園全体のバランスを鑑みての次年度イメージなど、それぞれが具体的なイメージをもって次年度の希望を表出していることを明らかにした。自身の専門性に対するビジョンを明確に持って、主体的に保育を構想しているといえるだろう。保育者として学び続け、保育の質を向上させていこうとする姿勢自体が保育者の専門性とも考えられる。

一方、本研究では、特徴語を抽出し分析を行ったため、自身の生活や私的な事情等がどのように考慮されるかは触れることができなかった。また、次年度の希望を考えるにあたっての消極的な理由もいくつか見られたが、これについても触れることはできなかった。

今後は保育者の語りを元に分析する方法を用いて、今回触れることができなかった部分も含め、保育者の主体性について、さらに検討を深めていきたい。

## 注

注1) KHCoderを用いた、自由記述の内容分析については、田中京子 (2013) 「KHCoderとRを用いたネットワー

ク分析」久留米大学コンピュータジャーナル  
vol.28.37-52に詳しくその方法が記載されている。

注2) 希望クラスは、持ち上がりであるか、持ち上がりではないか、という設問での調査であったため、「持ち上がり希望せず」の163名については、調査時、5歳児クラスの担任23名、異動予定者14名、退職予定者1名も含まれている。なお、5歳児クラスの担任23名の内、3名は異動予定者であった。

注3) 注2同様、「無回答」70名については、調査時、5歳児クラスの担任3名、異動予定者28名、退職予定10名も含まれている。なお、5歳児クラスの担任3名の内、2名は異動予定者であった。

## 引用文献

- 樋口耕一 (2015),『KHcoder2x リファレンス・マニュアル』,  
フリーソフトウェア内 <http://khc.sourceforge.net/>  
2017年5月14日
- 神戸康弘・上地玲子・松浦美晴・鳥越亜矢・森英子・中  
川淳子・嵐島礼子 (2016),「潜在保育士のキャリア研

- 究-20代30代保育士の「退職者」と「継続者」の比較  
による離職防止研究-],『山陽論叢』,第23巻,49-64
- 菊地政隆 (2007),「現任保育者の職業継続理由に関する  
調査」,『佐野短期大学 研究紀要』,第18号,221-227
- 金城悟・安見克夫・中田英雄 (2011),「保育職の大変さ  
とやりがいに関する保育者の意識構造について～ M  
-GTAによる分析の試み～」,『東京成徳短期大学 紀  
要』,第44号,25-44
- 中根真 (2012),「保育者のワーク・ライフ・バランス  
(Work-Life Balance) 研究序説-保育者論の新たな展  
開のために-」,『龍谷大学論集』,(480),46-66

## 謝 辞

本研究にご理解いただき、年度末の忙しい時期に  
もかかわらず、アンケートにご協力下さった保育者  
の皆様および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(きむ よんじゅ・かたかわ ともこ)

【受理日 2018年10月9日】